

編集後記

第3次人工知能（AI）ブームが加速している。2017年12月に、公道での乗用車無人自動運転の実証実験が始まった。2018年2月には、スマートフォンで配車を依頼すると、自動運転配車サービス（日産とDeNAにより開発中）により無人ドライバーの乗用車が現れ、乗り込むと希望する行き先に連れて行ってくれる、という公道での実証実験が行われた。高齢ドライバーによる死亡事故が社会問題となっている現在、高齢者の交通手段確保への明るい光に思える。

医療界でもAIの導入が進んでいるが、看護界ではどうだろうか。身近な機器で考えると、血圧計、体温計、パルスオキシメーターなどは、人間では測定不可能な人体の状況を測定して知らせてくれる機器である。もし、対象者のデータが蓄積され、いま測定したデータを瞬時に過去のデータと比較したり、過去からの推移をグラフ等で示してくれるAIがあれば、在院日数の短縮によるアナムネ聴取や退院サマリー作成に追われずに済むかもしれない。もし、体表面温度等や体動の変化をモニターするAIがあれば、巡視間隔に依拠せず異常の早期発見ができるかもしれない。そんなAIを開発する看護師が出てくることに期待しつつ、「測定」ではなくデータの分析と判断に時間をかけることや、不安な対象者のそばにいて話を聴く、という看護本来の大事なことに時間を使いたい。看護は、代替可能性の高い職業とはいわれていないが、先端技術の導入とゆずれない専門性を融合させ、発展・進化していくために研究が必要である。

東邦看護学会は、東邦看護研究会から学会へ発展して8年目を迎えました。本誌15巻2号には、研究報告4編、実践報告4編、資料4編の計12本という過去最多の論文を掲載しております。多くの投稿、ありがとうございました。機関リポジトリへの登録開始後、本誌のダウンロード件数が年々増加し、ここ数年は28,000件前後で推移しています。掲載論文は広く公表され、多くの方々の目に触れるため、論文としての質を高める査読のプロセスは非常に重要です。論文を書くことに慣れていない場合には、査読者や編集委員会からのコメントに大変苦しい思いをされることもあるかもしれませんが、複数回の査読プロセスにより、内容が精練され、誰が読んでも同じ理解ができる文章表現になっていっています。研究成果の公表は、自分のメモではなく、日頃行っている看護実践について広く知ってもらい、看護の対象となる方々へより良い看護を提供するための共有財産です。それゆえ、学会としても、掲載する論文に責任を持つ意味で、厳正な査読プロセスを実施させていただいております。

最後になりましたが、査読者の皆様には大変お忙しい中、論文掲載に向けてご協力をいただきましたこと深く感謝申し上げます。

村上 好恵

編集委員会

| | | |
|-----|--------|------------------|
| 委員長 | 村上 好恵 | (東邦大学看護学部) |
| 委員 | 河上 智香 | (東邦大学看護学部) |
| | 小笠原有希子 | (東邦大学医療センター佐倉病院) |
| | 金坂伊須萌 | (東邦大学看護学部) |
| | 清田 和弘 | (東邦大学医療センター佐倉病院) |
| | 小林 敏子 | (東邦大学医療センター大橋病院) |
| | 橋本 裕 | (東邦大学医療センター大森病院) |
| | 百瀬 修久 | (東邦大学看護学部) |
| | 芳澤 正子 | (東邦大学医療センター大森病院) |
